

早稲田大学 人間科学学術院 人間科学会 諸費用補助成果報告書 (Web 公開用)

申請者 (ふりがな)	小林 勇太 (こばやし ゆうた)
所属・資格 (※学生は課程・学年を記載。卒業生・修了生は卒業・修了年月も記載)	人間科学研究科修士課程 1 年
発表年月 または事業開催年月	2022 年 10 月
発表学会・大会 または事業名・開催場所	日本認知・行動療法学会第 48 回大会
発表者 (※学会発表の場合のみ記載、共同発表者の氏名も記載すること)	小林 勇太, 小林 莉奈, 内田 太朗, 田口 潤一郎, 柳田 綾香, 富田 望, 熊野 宏昭
発表題目 (※学会発表の場合のみ記載)	日常生活下の強迫症状に対する体験の回避と脱フュージョンの影響の検討
発表の概要と成果 (抄録を公開している URL がある場合、「概要・成果」を記載した上で、URL を末尾に記してください。また、抄録 PDF は別途ご提出ください。なお、抄録 PDF は Web 上には公開されません。)	
<p>・概要</p> <p>【問題と目的】</p> <p>強迫性障害 (OCD) とは、思考やイメージである強迫観念と、それに対応する繰り返し行動である強迫行為を特徴とする精神疾患である (American Psychiatric Association, 2013 高橋・大野監訳 2014)。OCD に対するアプローチの一つにアクセプタンス&コミットメントセラピー (ACT) が挙げられる。OCD には、ACT における思考や感情など私的出来事を制御しようとする行動的プロセスである体験の回避 (Masuda・武藤, 2011) が強く関連していると考えられる。さらに、OCD では思考内容を字義通りに受け取ることで行動が言語により制御されてしまう行動的プロセスである認知的フュージョン (Hayes et al., 2013) の問題も挙げられ、脱フュージョンが必要であると指摘されている (Twohig, 2009)。しかし、体験の回避や脱フュージョン傾向が日常生活場面で変動する強迫症状に具体的にどのような影響を及ぼすのかは検討されていない。そこで本研究では、日常生活場面の強迫症状に含まれる行動連鎖を生態学的経時的評価法 (EMA; Shiffman, Stone, & Hufford, 2008) を用いて測定し、体験の回避と脱フュージョン傾向がその行動連鎖に及ぼす影響を検討する。</p> <p>【方法】</p> <p><調査対象>4年生私立大学に通う学生 25 名に調査を実施し、19 名 (男性 5 名, 女性 14 名, 平均年齢 22.37 歳, $SD=5.54$) を分析対象とした。<調査材料>(a)日本語版 Acceptance and Action Questionnaire-II (AAQ-II; 嶋他, 2013): 体験の回避傾向を測定した。(b) Defusion Process Questionnaire (DPQ; 川井他, 2016): 脱フュージョン傾向を測定した。(c) 日常生活場面における強迫症状を測定する Web アンケート: 不快な私的出来事 (強迫観念, 不快感情), 非機能的行為 (強迫行為, 抑制, 回避, 監視), 行動直後の不快な私的出来事の変化, を測定する。<手続き>質問紙への回答後, 2 週間 1 日 3 回程度の Web アンケート調査を実施した。</p> <p>【結果と考察】</p> <p>不快な私的出来事, AAQ-II, それらの交互作用項を説明変数, 各非機能的行為を目的変数としたマルチレベル重回帰分析を行った。その結果, 強迫行為において, 不快な私的出来事と AAQ-II のレベル間交互作用が有意であり ($b=.015, p<.01$), 単純傾斜分析を行ったところ, AAQ-II+1SD, AAQ-II</p>	

-1SD のどちらの条件においても、回帰係数の値は有意になった ($b=.294, p<.01$; $b=.071, p<.05$)。次に、各非機能的行為、AAQ-II、それらの交互作用項を説明変数、不快な私的出来事の低減を目的変数としたマルチレベル重回帰分析を行った。その結果、強迫行為の主効果が有意であった ($b=.878, p<.01$)。これらの結果から、体験の回避傾向が高い者では、強迫観念や不快感情を体験した時に強迫行為が強く表れ、それにより強迫観念や不快感情が低減されることで、強迫行為が強化されるという行動連鎖が存在すると考えられる。そのため、強迫観念や不快感情が生じても強迫行為を行わないためには、体験の回避を減らし、体験の回避の代替行動であるアクセプタンスを増やす介入が効果的であると考えられる。

・成果

上記の研究内容についてポスター発表を行い、参加者と意見交換を通して交流を図った。自分の研究について意見を共有してもらうことで理解を深めることができた。

※無断転載禁止